

書籍紹介



ジャレド・ダイヤモンド、
ノーム・チョムスキー、
オリバー・サックス、
マービン・ミンスキー、
トム・レイトン、
ジェームズ・ワトソン 著
(吉成真由美[インタビュー・編])
NHK出版

『知の逆転』

情報が氾濫する現代、視野狭窄にならずに、何を基準として、ものごとの善し悪しを判断し、自分の考えや行動を決めるか。学問の常識を逆転させた人々の考えがヒントになります。

生物学者で「銃・病原菌・鉄」の筆者であるジャレド・ダイヤモンド氏は、教育について「それぞれの国の事情に合った教育制度の中で、読み書き能力の促進と、なるべく広く行きわたった教育というものが望まれている」と言います。パプア・ニューギニアでは、国の事情をかえりみず高等教育制度が導入されました。しかし、若者達は、高等学校までの教育では、現代社会で良い職業に就くことは難しく、かといってこの教育を受けるために村を離れてしまっているので、農業に就くためのノウハウも習得できないという国家的悲劇を生みました。制度のみに着目するのではなく、それぞれの事情にあった制度を取り入れないと失敗するという事は、判断の一つの基準になります。

「生きている人の中でおそらく最も重要な知識人」とニューヨーク・タイムズで形容された言語学者のノーム・チョムスキー氏は、資本主義社会において、政府による規制は絶対に不可避だと言います。例えば、車を売買する場合、売り主と買い主の双方にとって納得の行くような取引をするわけですが、その車によって交通渋滞が起こったり、大気汚染が起こったり、原油価格が上がったりと、取引に関わらない人にも影響を与えます。チョムスキー氏は、政府がこの影響を規制すべきだと提言しています。普段あまり考えない第三者のことを思考に加えるだけで、車の売買から政府の規制まで話を繋げる発想の転換は流石です。

また、インターネットの普及によって、ウィキペディアなどのような「集合知能」がもたらされており、この「集合知能」に多くの人が期待を寄せています。しかし、DNA二重らせん構造の解明という偉業を成し遂げた



ジェームズ・ワトソン氏は、「(みな同意を得なければならない)総意というのは往々にして間違っているものです。あくまで「個人」が際立つ必要がある。」と言い、「人工知能の父」とも呼ばれるコンピュータ科学者のマービン・ミンスキー氏は、「多くの人々が大賛成した場合のほとんどは、大惨事になるか、文化が崩壊するか、大衆をうまく説得するヒトラーのような人物が現れる、といった悲劇に結びついています。」「大衆の「集合知能」のほうは、逆に科学を何百年も停滞させてきたのです。」と言います。確かに、ウィキペディアは自分が知らない事実を調べるにはとても便利です。しかし、論争になることもあり、間違うこともあります。やはり、集合知能よりも自分自身で考えて判断できる能力が重要なのでしょう。

学問の常識を逆転させた人々の語る言葉から、常識を疑い、常識に縛られず、発想の転換をおこなうこと、自分が予想をしなかった考えを示すものに柔軟に接すること、考えや行動を決めるのは結局個人であるという姿勢をもつことが意思決定の助けになるとわかります。

本書では、上述の4人の他に、「レナードの朝」の著者で脳神経科医のオリバー・サックス氏、誰も知らないインターネット上最大の会社「アカマイ」の共同設立者であり取締役である数学者トム・レイトン氏が専門分野について熱く語ります。さらに6人にインタビューを行った編者の吉成真由美氏は、彼らに「インターネット社会の将来」「教育」「宗教」「若者への推薦図書」など共通した質問をしています。自分の興味ある部分を読むだけでも、学問の常識を逆転させた人々の考えに触れることができます。更に興味を持った方は、彼らの著書を読むことをお勧めします。

最後に、ノーム・チョムスキー氏の言葉を読書好きな皆さんに贈ります。

「一番いいのは、自分で探して、驚くようなこと、予想もしなかったような本を発見するということでしょう。」

紹介者 審査第二部熱機器 土屋 正志